

絶望娘



成人向

絶望娘



マエガキ



■マフマフ

前書き:

【絶望】ぜつぼう

(名)スル

すっかり望みをなくすこと。希望を失うこと。

【娘】おすめ

(1)親にとって、女の子供。息女(そくじよ)。

(2)若い未婚の女性。(goo辞書調べ)

つまりは、そういった本です

(おいおい! なんと無責任なんだ、マフマフは
最後までお楽しみいただけましたら幸いです。

■浜岡ポン太

マフボコ活動同人誌第1冊目です。わー!わー!

楓ちゃん好き好き! 千里ちゃん好き好き! (´Д`)ノ?ノ?

1冊になって嬉しい限りですー。

楽しんで頂けるともっと幸せな気持ち。

マフマフ 原作シナリオ ポン太 絵描き
という感じで絶望娘お届けですー。

描くともっと好きになっちゃってまだ作業残ってるのに
次の本の事ばかり考えてます。エヘヘ。

先生抱いて
下さい

木津さん……

千里ちゃんの純情

その後ろに
隠しているモノは
なんですか？

うふふ先生
気付いちやっ
たんですか

！

そんなの
脅迫じゃ
ないですか！

いい加減
きつちいと私を
抱いてくたせー

ね、先生…

ホラ

おっ=中絶

!!

男がアドバンテージを取れない性交渉に絶望した！

絶望したー

おっ=中絶

そんな事言ったって最近の男子はマクロな人ばかりじゃない

絶望したー

マクロの消費量だけでなく

マクロ男子生産量も世界一な日本に絶望した！

そんな事を言っても
先生だって
まぐろなんですよ

3/4

！
してあげる
先生…

できてきちゃったよ

いけませッ…！

1/2

おっきくして
あげます

あ

4/4

1/2

2/2

3/2

4/2

5/2

6/2

7/2

8/2

9/2

10/2

11/2

12/2



絶望したー！

気持ち良くて
拒否出来ない自分に
絶望したー！

…拒否
できないなら…
私の初めて貰ってね

きっ……

かほ

あ

絶望したー

初めてを買ってと
言いつつ自分から
私を犯そうとする
強行犯的な女子生徒に
絶望した！

うるさいなあ
つべこべ言わないで

きつちり私に
喰われなさい

あめっ

……あめっ

入ったッ……よ
センセ……イ……

あ

は



絶望したー

どう考えても
ヤンデシな彼女に
胸をキュンとさせた
自分に絶望したー

さっきから
絶望しっぱなしね
先生

良くして
あげるッ

あん
あああああッ

すっぴん
すっぴんのおー

おん

おん

おん

おん





おあおあおあ

おあおあおあ

おあおあおあ

おあおあおあ

おあおあおあ

おあおあおあ

おあおあおあ

おあおあおあ

おあおあおあ

おあおあおあ

おあおあおあ

おあおあおあ

んあ……
先生……

絶望したー

はじめてのセックスで数秒しかもたないという早瀬ぶりに絶望したー

と言うか過狂も少ないぞ

中に出してしまっというある意味男らしい自分に絶望したー

…先生絶望してる所悪いけど実は私7日前に生理が終わったの

なっー

そう
超危険日
なのよ

それはまさか

あー
おめでたー

それから10カ月後二人の間に第一子が誕生する

第一子

命名

糸色 頂

あびる牧場

「ああっ！ だう、ダメえー！ 先生えー！」
「まったく、どういふことですか、小節さん」

先生の手には余るほどのポリリウムある乳房を、乱暴に掴む。驚掴みにし、思いきり揉みたく。

「おっぱいがこんなに大きく成長してしまっ、いやらしい生徒さんですね」
「そんなこと言われても、成長期ですから」

フツと口元で笑んだ先生は、二つの乳首をキツと摘んだ。

「ひゅっ、ひゅっ」
「気持ちいいでしょう？ 小節さん。アナタのおっぱいはアナタが気持ちよくなりたが故に、こんなに大きくなつてしまつたのですよ？」

「ウソです。そんなことおっぱいが大きくなるなんて、聞いたことありません」
「事実なのですよ、小節さん。現実を受け入れなさい！」

先生は強く言葉を言い放ち、巨大な乳房を大きな円を描くように、むにゆりむにゆりと揉み上げる。

「やはあうん、先生、変に、変になるう」
「変になるのですか？ こんなに感じてしまつて、スケベな生徒さんですね」

あびるは目を閉じて、顔を背ける。しかし先生はあびるの顔を掴み、無理やり自分の方へと向けさせた。あびるは目を閉じたまま、先生の方を向いている。

「恥ずかしいよ、先生」
「何をはずかしがっているのですか？ あんなに激しいセックスをした仲でしょうか？」

あびるの頭に、先生との行為がフラッシュバックした。心の奥に仕舞い込んでいた記憶が、無理やり引きずり出される。

あびるの顔が羞恥に歪んだ。目の端にうっすらと涙が浮かぶ。

「あ、あれは、先生が」
「あれつて、なんですか？」

あびるの言葉を遮る様に、先生は乳房をぎゅうつと握り締めた。

「やっ！ はあああん！」
「びゅるるッ」

乳首の先端から、白い液体が放射された。あびるが放つた薄白色の汁、それはミルクだった。

「小節さん、すこいですがね、お乳が噴出しましたよ！」
「え？ そんなー！ ウソ……」

あびるは目を半分だけ開き、自分の乳首に目を移す。乳首とその周辺が、白色汁で濡らされている。

「これ、一体どのくらい出るんでしょね。調べてみますか」
先生は乳房の付け根を掴み、上に向かって絞り上げる。

「やー！ やー！ やあああ！」
「びゅるッ、びゅるるるッ」
先ほどとは比べ物にならないくらいに、大量のミルクが噴出した。

「小節さん、お乳を噴出す女子高生だなんて、エロすぎですよ？ お乳が出る巨乳を持つ女生徒さんですか？ そんなの、存在自体がエロすぎです」

「そんな、ひどい。先生、わたしエロくなんてないです」
「エロいですよ。」賢なさい、「ご自分のおっぱいをー！ これのどがエロくないと言つてですか？」

あびるのおっぱいは、ミルクでべったりと濡らされ、先生の手もびつよりと濡れていた。ミルクまみれのあびると先生、ひどくエロい光景である。

「わたし、そんな、わたし……」
あびるは恥ずかしい気持ちで、胸が潰されそうになる。そんな羞恥に

さいなまれるあびるを、先生は薄笑いを浮かべて見つめる。

「そういえば小節さんは、動物のしっぽが好きでしたね」
「は、はい、わたし、しっぽ、エチなんです」

「そうですか、なら、先生のしっぽをあげましょう」
「先生のしっぽって……きゅッ」

先生は袴のすそを掴み、一気にすり上げた。そして、ぶるんと揺れた愚息が現れる。あびるは目の前からさがつて、男のモノから顔を背ける。

「何を照れているのですか？ これはアナタの中に入った、大事なち●ぼじゃありませんか？」

「そんな、そんなこと言わないでよ、先生」
先生はあびるのスカートの中に手を入れ、薄い布で隠されている茂みに触れる。

「やっ！ だめ、さわらないで、先生」
あびるは開いていた太ももを閉じ、先生の手を挟んで押さえた。しかし、手の動きを止めたのはいいが、先生が指を伸ばすと、指先が茂みにまで届いてしまつた。

先生はあびるの茂みをすりすりしとさする。

「せ、先生、そこ、そこはダメだよ」
先生はあびるの言葉を無視し、茂みをさすり続ける。

「そうだ、小節さん。今から検査をします。卑猥な下着をつけていないか、身体検査です」

先生はおもむろにスカートをめくり上げた。

「や、いやあ」
あびるはごくごく普通の、白い木綿のパンツを履いていた。しかしそのパンツは、

どんな下着よりもエロく変り果てていた。あびるのパンツは、大量の愛汁を吸い、くっつきと湿っていたのだ。そして、ぶつくりとした突起が、パンツの中心部に

浮かび上がつていて、あびるの愛汁は、すっかり勃起してしまつていた。

先生はその突起を、中指の先でくっつきとゆくとねる。

「ああっ！ 先生、ダメです！ それ、だめえー！」
あびるを隠している布が、更に水っぽく変色していく。もう吸えないというほどに

大量の汁を吸つたようで、布越しなのに先生の指が濡らされる。
「すこいですがね、こんなに濡らして、そんなに私としたいのですかね」
そう言つて先生は愚息をあびるの茂みに近づけていく。
「だめ！ それはだめえー！ 先生、それはダメなお」
「何がダメなのか、先生にはわかりません。挿れちゃいますよ？ 小節さん」

先生はパンツを横にずらし、あびるのお●んこをあらわにする。

「いやあーやめてえー！はすかしいよーやめてえー！」

あびるの抵抗の音が、空しく響く。先生は愚息の先っぽを臍口にあてがった。

「くちゅー、ひどく卑猥な水音がした。先生の愚息に、熱い体温が伝わる。あびるのお●んこはひどく火照って、とろとろにとろけていた。」

「小節さん、アナタのお●んこが、先生を欲しとおねだりしていますよ」

「やあ！変なこと言わないでください！そんなことないです、絶対にないです！」

「そうは言っても、簡単に挿ちやいますよ？」

先生は腰を、勢いよく突き出した。

「あッ！あああああッ！」

あびるは甘い悲鳴を上げながら、先生の愚息を受け入れた。奥の奥まで、先生の愚息が入っていく。

先生は根元まで挿れると、腰を動かして愚息を出し入れする。

「あッ！あああ！先生！あああッ！」

「動物のしっぽなんかより、人間のしっぽの方が遥かにいいでしょう？」

「いい！いいッ！先生、いいよ！先生のしっぽ、良すぎだよ！」

強烈な快楽に負け、あびるは素直な気持ちで漏らしてしまふ。先生が不敵に笑う。

「なら、もっとよくしてあげますよ？」

先生は愚息にググッと力を込め、更に硬くした。

「ひッ！ひあああああッ！擦れる！擦れちゃうッ！」

硬みを増した愚息が、あびるの肉壁をえぐるように擦り上げる。あびるはたまらず腰を跳ね上げ、臍をきつく締める。先生の愚息がぎゅーううと締めつけられ、先走り汁がびゅーりと絞られた。

「や、やん、なんだか、熱いのが出たよお」

「しよがないですね、小節さんは、そんなに締めなくて、臍に出しちゃいますよ？」

「出しちゃうの？こないだみたいに、臍に出しちゃうの？」

「そうですよ、臍にたごり出してあげますよ、小節さんの奥の奥に、びゅーびゅー、びゅーびゅーとね」

あびるは顔を真っ赤にし、恥ずかしそうに目を細める。

「先生、この前、バジンの私を無理やり犯して、中出ししちゃったんだよね」

「何を言っているんですか、あなたから誘ってきたのでしょ？」

「何言って、告白してきたじゃないですか」

「だからって、いきなり押し倒して、無理やりしっぽを挿れるなんて」

「しっぽ？ああ、お●んちんのことですか？」

あびるは更に目を細めた。羞恥に顔が歪む。

「や、やあ、い、言わないでえ」

「おや、小節さん、恥ずかしいのですか？お●んちんを挿れられたことが」

「ストレートな先生の物言いに、あびるはひどく強い羞恥を抱く。そして、絶えられなくなる。先生の言葉を拒むように顔を左右に振り、そして訴えかける。

「いやあ！恥ずかしい、恥ずかしくて変になっちゃう。しっぽ、しっぽなの！これはしっぽが入ってるんだもん」

「まったく、ちゃんと見てごらんさい。入っているのはしっぽじゃなく、先生のお●んちんですよ」

先生はあびるの頭を掴み、下腹部に顔を向けさせる。あびるの目に、臍を激しく突いている、淫靡な性交シーンが映り込む。先生が差し入れるたびに、臍の周辺からがじゅぶじゅと愛汁が溢れ出る。

「やッ！やああ！こ、こんなの、こんなの見せないでえー！」

あびるは首に力を込め、逃れようとする。しかし先生の手の力の方が強く、逃がしてはくれない。

「まったく、いやらしいですねえ、小節さん」

先生はあびるの耳元で囁く。

「見せないで言うわりには、そんなにジッと見つめてしまつて、そんなに嫌なら、目を閉じればいいじゃないですか」

確かにその通りである。嫌なら見なければいい。しかし、あびるは目を閉じることが出来なかった。そのひどくいやらしく、淫靡な光景に、あびるはすっかり魅了されていた。恥ずかしいのに、嫌なのに、目を背けられない。心では嫌がっていても、頭が受け入れてしまっている。

「そんなにセックスが好きなのなら、もっともつと、よくしてあげます！」

先生は全力で腰を打ちつける。周囲にパンツ！パンツ！と、肉が打たれる音が響く。

「ああ！だめえ！そんない、いっっちゃう！いっちゃうよッ！」

「いいですよ、小節さん、好きなだけイキなさい。イッてもやめませんからね」

「そ、そんなあ、あッ！イク！イク！イク！イク！イク！イク！」

あびるは全身をヒクヒクと震わせ、同時に臍をぎゅーううと締め上げた。

あびるの全身に甘い衝撃が走る。

「ふみッ、果ててしまわれたようですね、ですが、このまま続けますよ、小節さん」

きつく締めつけられても、先生はおかまいなしに、愚息をすんすんと突き挿れる。

「だッ！ダメエー！そ、それ、変に！変になっちゃう！イッてるの、わたし、イッてるの！」

「知ってますよ、イッているのなんて、知つて突いているのですよ」

「やあーやあーあんッ！また！またきちゃう！きちゃうよお！」

あびるはヒクヒクと腰を跳ね上げ、再び臍を締め上げた。

「またイッてしまつたのですか。本当にとスケベで、どうしようもなくいやらしいですね、小節さん」

「そんな、そんなこと無いです。わたし、スケベなんかじゃ」

「何を言っているんですか。ち●こたま●こが繋がって、出し入れしているところを夢中になって見つめて！今なんて、何度も何度も絶頂を繰り返して、

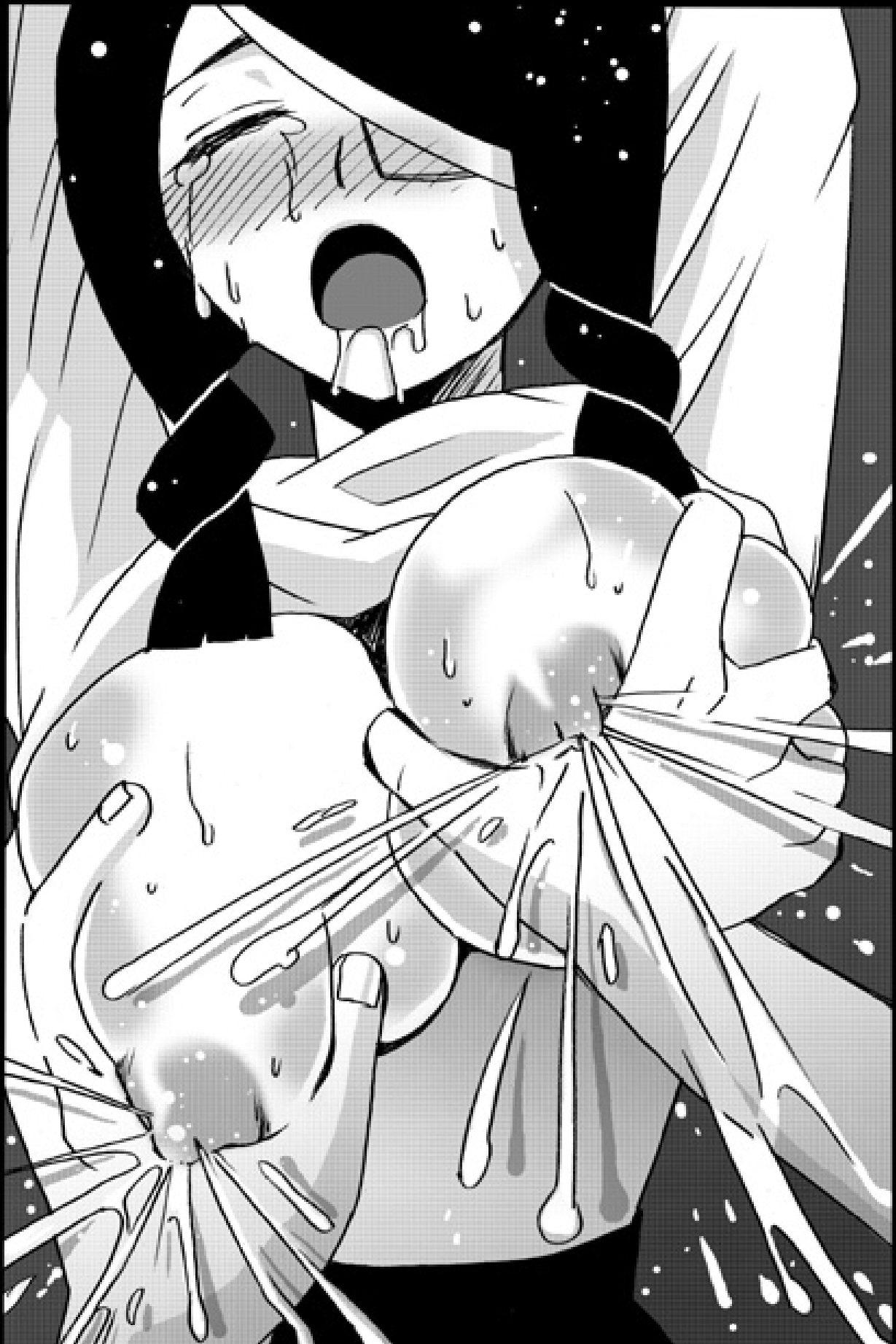
とっつもない淫乱娘ですよ！」

「違う、違うもん！」

「違いますよ、あなたほど淫乱ですよ！絶望した！式回目のセックスで

いきっぱなしになる、超がつくほどの変態な教え子に絶望した！」

先生はスパートとばかりに、全速力で腰を打ちつける。激しすぎるピストンのせいで、愛汁が秘花の周辺に飛び散る。





先生ツ・・・

楓さん本当に
いいんですね

あつ先生
聞いて下さい

何をですか？

あツ

私ツ

カエデの一人上手

毎日毎日先生を想って

あーハハハハ

オナニーしてるんですけど……

あーハハハハ

ハハハ

こうやって
たくさん
つまんで
こすって……

あーハハハハ

ムシムシ

あッ
ハハハハ
ハハハハ
ハハハハ

そうしていたら

あーハハハハ



ピンク色になった
私を見て欲しかった
んです

楓さん

私を想って
そんなに
いやらしい身体に
なってしまうって…

あう…

おっ

びん

自んが…

は

あッダメ先生
乳首をつまんだら
私ッ！

キィ

ゴクン



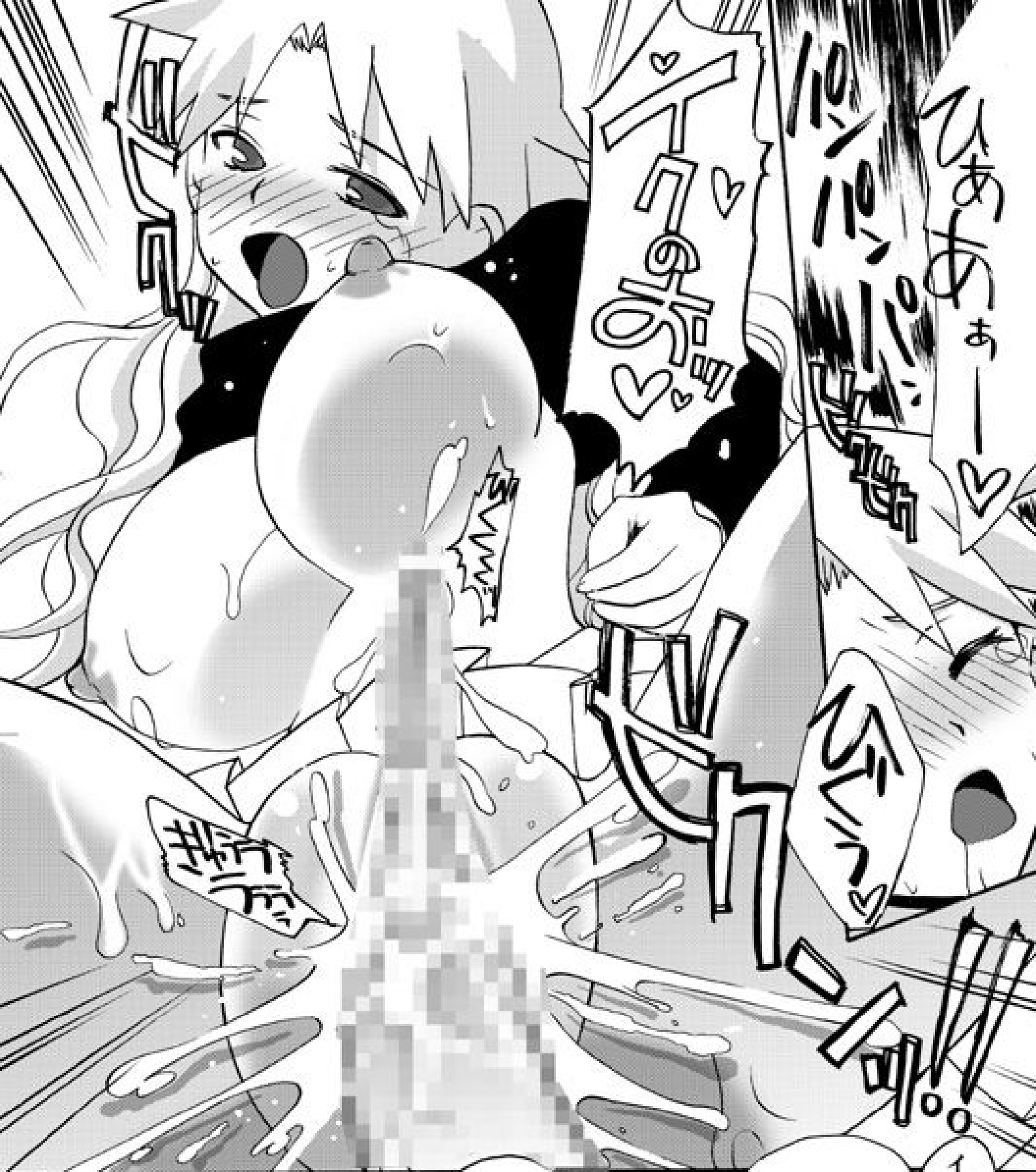


知っていますよ
楓さん

あ私ッ
はじめてで...







イツたんですか

自分で慰めて
いただけあって
すっかり開発
されていますね

はあ、

本当に
いやらしい子だ

いやあー！
言わないでえ



恥ずかしい… 私こんな淫乱で

とても恥ずかしい

おめえ

おめえ



ドキン

…ッ
そっんなあなたには
こうしてっ

あげます!

自分で自分をスケベに
してどうしようもない
淫乱女ですね
楓さんは





トキ

トキ

トキ

トキ

トキ

トキ



絶望したー！

まったくもって
申し開きが出来ない
状況に
絶望したー！

先生私
7日前に生理が
終わったの

なっ
それはまさか…

そう
超危険日なのよ

それから10カ月後
二人の間に第一子が
誕生する

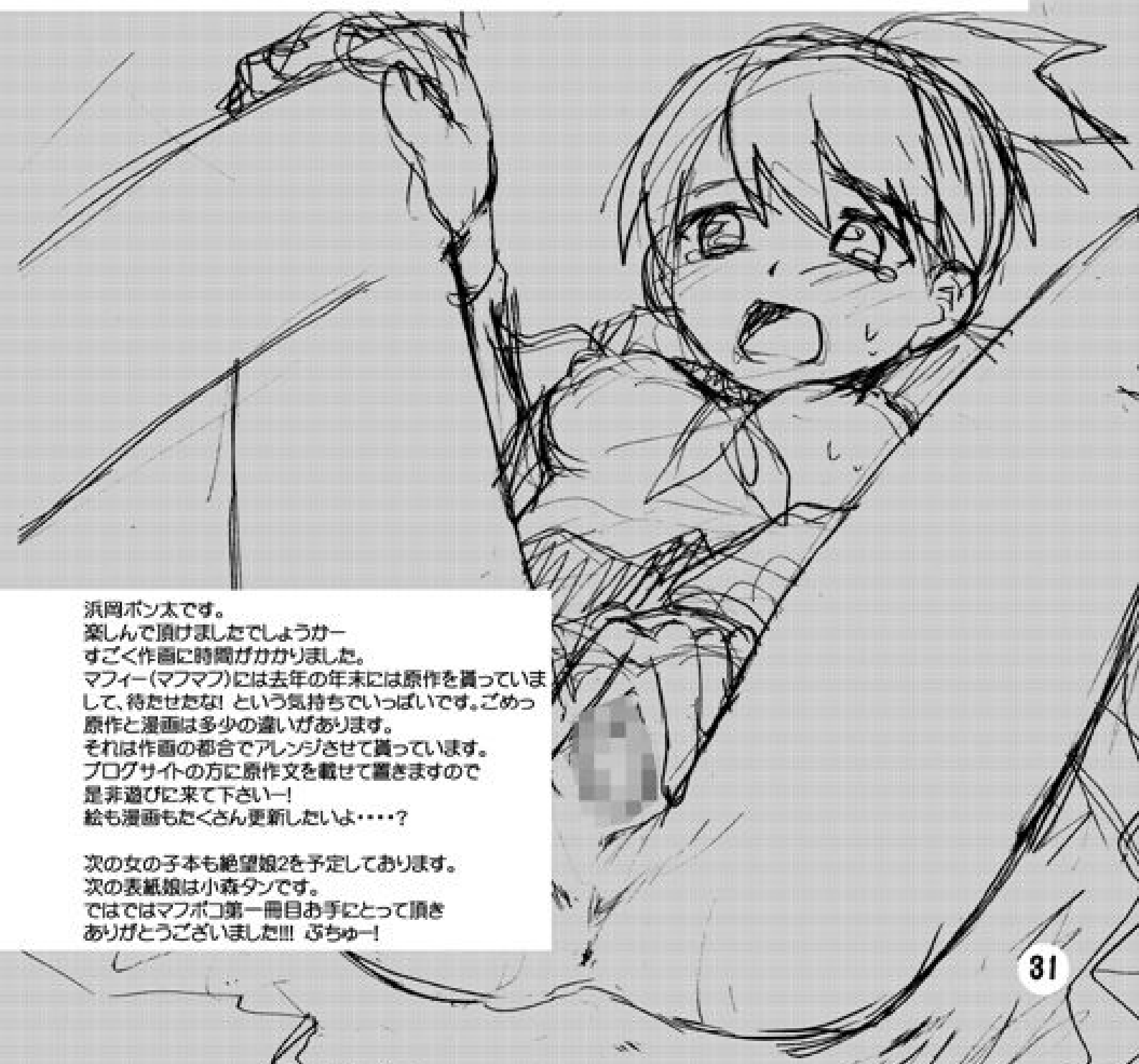
オキナー

命名

糸色 壁

アトガキ

朝であれば、おはようございます。昼であれば、こんにちは。
夜であれば、おやすみなさい(ええ?)はじめましての方は、はじめまして。マフマフと申します。
「みんなでマフマフ」(マフマフ個人サークル)の本を読んだことのある方は、見たことがある
書き出しですよね。すみませんです(もう謝った!)
えーと、みなさん、愛してます(いきなりだな、おい!)
この本を手に入れている方は、無条件で愛させていただきます(勝手だな、マフマフは)
文章書きなボクちゃんは(絵が書けないので文章書きなのですよ……)、前々から「ボクちゃんの文章が
マンガになったらなあ」という夢を、心の中で描いていました。
叶いました(てへ)
本当にありがたい限りです。あまりにもありがたいので、寝るときはボン太のいる方向に足を向けられません。
そのせいで常に北枕になっているのは内緒ナイショ(残念だな、マフマフは)
そしてこの本を手に入いただいた皆様も、深く感謝です。やはり寝るときは足を向けられません。
とはいえ、皆様がどこに住んでいるのか分からないので、これからは立って寝ます(大変なことになりました)
これからも臆りずに作品を生み出して参りますので、皆様、よろしくでございます!



浜岡ボン太です。
楽しんで頂けましたでしょうかー
すごく作画に時間がかかりました。
マフィー(マフマフ)には去年の年末には原作を買っていま
して、待たせたな! という気持ちでいっぱいです。ごめっ
原作と漫画は多少の違いがあります。
それは作画の都合でアレンジさせて買っています。
ブログサイトの方に原作文を載せて置きますので
是非遊びに来て下さいー!
絵も漫画もたくさん更新したいよ……?

次の女の子本も絶望娘2を予定しております。
次の表紙娘は小森タンです。
ではマフボコ第一冊目お手にとって頂き
ありがとうございました!!! ぷちゅー!

絶望娘 Vol.1

発行
マフポコ

発行者
浜岡ボン太
マフマフ

URL:<http://mahupoko.blog62.fc2.com/>

本書の無断転載(スキャン、コピー等)を禁じます。





ZETSUBOU MUSUME
2008

